

未来を切りひらく〈知〉の挑戦者たち

総合大学である本学では、幅広い分野で最先端の研究が行われています。世界の問題を解決し、社会改革の起点となる最新研究の一部をご紹介します。

健やかに暮らせる社会の実現を求めて 医学研究院 教授 玉腰 暁子 TAMAKOSHI Akiko



3 平野の心に健康と福祉を

公衆衛生学が専門の玉腰暁子教授は、博士課程のときから携わっている「JACC Study」という研究プロジェクトで、約12万人を対象に、20年にわたってがんなどの病気の発症状況を追跡調査しました。その結果さまざまな知見が得られ、研究成果は国が健康方針を示す際の基礎データとしても活用されています。また、COI『食と健康の達人』プロジェクトでは、北海道岩見沢市の母子を対象に、出生率の向上や健やかな成長支援などを目的とした調査に取り組みました。こうした研究は、すぐに政策に反映できるものではないので、多くの情報を時間をかけて収集・解析しています。このプロジェクトは2021年2月、第3回日本オープンイノベーション大賞日本学術会議会長賞を受賞しました。

最近では、札幌市の依頼で新型コロナウイルスの感染者のデータ分析などを行うとともに、本学医学部の学生らが新型コロナウイルスに関する必要な情報を、若い世代に向けて発信する「No More Corona(ノー・モア・コロナ)」プロジェクトの監修も務めました。



岩見沢市の取り組みをフリーペーパーで親しみやすく紹介

文化遺産と今をつなぐ 観光学高等研究センター 准教授 岡田 真弓 OKADA Mayumi



17 平野の心で自然と文化をつなぐ

観光学高等研究センターの岡田真弓准教授は、考古学と現代社会とのつながりを考える「パブリック考古学」を起点にした文化遺産研究に取り組んでいます。パブリック考古学では、研究者だけでなく、地域住民や行政組織、観光客などが文化遺産に対して抱くそれぞれの価値観を重視し、文化遺産とわたしたちの関係をより良くすることを目指しています。

現在は、北海道におけるアイヌ民族の文化遺産マネジメント、とくに観光を通じた文化交流について研究を行っています。先住民民族に関連する文化遺産には、独自の精神文化や伝承に基づいて意味づけされた景観や聖地が含まれています。しかし、すべての人がこうした文化遺産の意味を理解しているわけではありません。だからこそ、文化交流の手段としての観光に期待が寄せられるわけですが、当事者にとって大切な場やコトが観光対象になることに戸惑いが生じることも少なくありません。岡田准教授は、アイヌ民族の文化遺産の活用に取り組む地域で調査を行い、文化遺産と観光をめぐる課題を具体的に抽出。関係者と対話を重ねながら、観光を通じた文化交流と文化遺産の保護をどのように両立できるか模索しています。



平取町沙流川流域のアイヌの口承が残る場所 ウカエロッキ
写真中央の岩の突起が、3頭のクマガイ山を駆け上がる姿に見える(胆振東部地震により現在は一部崩落)